

地道な音楽の求道者 たしかに実力と豊かな音楽表現

いくつもの楽団を鍛え上げ
世界のオーケストラ界の底上げを担ってきた

とかくスター性やカリスマ性、エキセントリックな個性がもてはやされる傾向のある今日の音楽界だが、その中にある人目に立つ活動を求めず、地道に音楽を追究している実力派は少なからずいる。エド・デ・ワールトはまさしくそうしたタイプの指揮者だ。彼の棒から繰り出される音楽はおおよそ派手さとは無縁。曲に対して真正面からアプローチし、けれん味を排した自然な流れのうちにじっくり表現を掘り下げて、作品そのものの魅力を聴く者に誠実に伝えていくところに、彼の身上がある。音楽に対するそうした姿勢は、同じオランダ人指揮者のベルナルト・ハイティンクに通じるものが感じられよう。実際、デ・ワールトは駆け出しの頃にアムステルダム・コンサートヘボウ管弦楽団（現ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団）でハイティンクの副指揮者を務めていたから、この先輩から大きな影響を受けたのかも知れない。

しかし、そのハイティンクに比べても、デ・ワールトの存在ははるかに「地味」である。それはひとつには、別掲のプロフィールをみても明らかのように、長年にわたり名門コンサートヘボウ管弦楽団のシェフを務めるという表街道を歩んだハイティンクとは対照的に、デ・ワールトが比較的マイナーな楽団のポストを歴任してきたことによるものだろう。例えば1977年から1985年に音楽監督を務めたサンフランシスコ交響楽

今月のマエストロ

エド・デ・ワールト

Edo de Waart

文◎寺西基之 | Motoyuki Teranishi

団にしても、前任者の小澤征爾のもとで進化を
みせていたとはいえ、当時はまだいわゆるビッ
グ・ファイブ(ニューヨーク・フィルハーモニック、ポスト
ン交響楽団に代表される、アメリカ大オーケストラの
こと)に比べてワンランク低く見られていた楽団
だった。デ・ワールトはこうしたいわば発展途上
のいくつかの楽団を鍛え上げ、その演奏レベル
を高めることに力を注いだ。もちろん多くの名
門楽団にも頻繁に客演して高い評価を得てい
たが、キャリアとしては地味なポストを歴任する
ことで世界のオーケストラ界の底上げに貢献し
てきたところが彼らしい。

作品そのものの美質をありのままに 自らの手で初演した《ハルモニレーレ》

表面的効果を狙うことなく、深い洞察による
作品解釈に基づいた確かな造型のうちに、豊
かな表情を息づかせるデ・ワールトの音楽性
は、とりわけドイツ物で真価が発揮され、これま
でのN響との共演でもベートーヴェン、ワーグ
ナー、ブルックナー、R. シュトラウスで底光りする
名演を聴かせてくれた。しかしN響とはラヴェ
ルやドビュッシーなどでも味のある演奏を披露
したことからわかるように、彼のレパートリーは
ドイツ物に限らないし、今回のプログラムのメ
インにアメリカの現代作曲家ジョン・アダムズの
《ハルモニレーレ》が選ばれていることにも示
されているように、現代曲にも積極的である。も
ちろんこのジャンルにおいても作品そのものの

美質をありのままに表現しようとする彼の姿勢
は変わらない。特に《ハルモニレーレ》はデ・
ワールトにとってサンフランシスコ時代に自らの
指揮で初演した愛着の強い曲だ。今回も、短
い音型パターンの反復と変化を生かすミニマ
ルの手法とロマン的な色彩感の融合のうちに
多様な音響空間が広がるこの大作の魅力を、
余すところなく表してくれることだろう。

[てらにし もとゆき／音楽評論家]

プロフィール

1941年オランダ生まれ、1963年にアムステルダム・
コンセルトヘボウ管弦楽団(現ロイヤル・コンセルトヘボウ管
弦楽団)のオーボエ奏者となる。1964年にニューヨーク
のミトロプロス国際指揮者コンクールで優勝、レナード・
バーンスタインのもとでニューヨーク・フィルハーモニック
の副指揮者を務めた後、コンセルトヘボウ管弦楽団では
ベルナルト・ハイティンクの副指揮者として経験を積
んだ。以後、ロッテルダム・フィルハーモニー管弦楽団、
サンフランシスコ交響楽団、ミネソタ管弦楽団、オラン
ダ放送フィルハーモニー管弦楽団、シドニー交響楽
団、香港フィルハーモニー管弦楽団、ミルウォーキー交
響楽団、ロイヤル・フランダース・フィルハーモニー管弦
楽団の音楽監督や首席指揮者を歴任、現在はニュー
ジーランド交響楽団の音楽監督を務める。2019/20
年シーズンよりサンディエゴ交響楽団の首席客演指揮
者に就任予定。コンサート指揮者としての活動の一方、
オペラの分野での活躍ぶりもめざましく世界各地の歌
劇場に客演、ネーデルランド・オペラの首席指揮者も
務めた。N響とは2009年4月以来しばしば共演している。
[寺西基之]



驚異的なレパートリー数を誇る 偉才の指揮者、3年ぶりの登場

全方位から寄せられるゆるぎない信頼
卓越した音作りのテクニック

イギリスの権威ある音楽評論誌『グラモフォン』は、毎年優れたディスクと音楽家を表彰する「クラシカル・ミュージック・アワーズ」を選定している。2018年の同賞では「生涯功労賞」という特別賞が、ネーメ・ヤルヴィに与えられた。50年を超える指揮者としてのキャリアと録音活動を記念しての表彰である。同誌によれば、ネーメ・ヤルヴィはこれまでに400点を越える録音を行い、100人以上の作曲家を採り上げてきた。数字だけを見ても、録音点数ではかのヘルベルト・フォン・カラヤンに次ぎ、また採り上げた作曲家数ではエフゲーニ・スヴェトラノフさえしのぐと思われるが、同曲再録音が少ないために作品数でみればカラヤンを圧倒しているし、ロシア・旧ソ連の作曲家が大きな比重を占めていたスヴェトラノフに対し、故国エストニアの作曲家からバーバー、アイヴズといったアメリカの作曲家まで、レパートリーは洋の東西を問わず幅広い。ひとりの指揮者として、これだけ多種多様な音楽を手がけた者は、おそらく他にいないだろう。

なぜこれほどの活躍ができるのか。ネーメ・ヤルヴィの息子であり、NHK交響楽団首席指揮者を務めるパーヴォ・ヤルヴィは『グラモフォン』誌の質問にこう答えている。「頼れる指揮者であるから、オーケストラの団員たちは彼のことを信頼しているのです。何かしたいとき、直し

今月のマエストロ

ネーメ・ヤルヴィ

Neeme Järvi

文◎相場ひろ | Hiro Aiba

たいとき、彼は他の誰よりも速くそれができる。それだけのテクニックを持っているのです」。そうした音楽作りの手際のよさは、ネーメ・ヤルヴィの作る音からも如実に感じることができる。彼の音楽には曖昧なところがなく、ストレートに突き進む。その中で拾うべきディテールはきちんと拾い、明晰なサウンドの中にきちんとはめこんでいく。余計な身振りはないけれども、聴きどころがないがしろにされることもない。だから彼の指揮には聴き手も弾き手も安心して身を任せられる。その安心感がオーケストラから彼へ寄せられる信頼の原動力であり、彼の驚異的な活動の源なのだろう。

柔軟かつ幅広い芸風を堪能する 意欲的なプログラム

今回のプログラムは、ネーメ・ヤルヴィの柔軟で幅広い芸風を堪能できるものとなっている。これまでも共演のたびごとに珍しい曲目を採り上げるなど異なる側面を披露してきた彼は、今回も興味深い2つのプログラムを用意している。ひとつはシベリウスとブラームスという王道の曲目と並んで、N響にとって初となる、彼の故国エストニアの作曲家、エドゥアルド・トゥビンの大作である《交響曲第5番》をかけるという意欲的なもの。そしてもうひとつはイパールの軽妙な《モーツァルトへのオマージュ》に始まり、フランク、サン・サーンスの交響曲を採り上げるという、ネーメ・ヤルヴィがN響で取り組む、初のオール・フ

レンチ・プログラムである。押しも押されもせぬベテランとなつてなお、このような積極的なプログラミングを実現できるネーメ・ヤルヴィのパワーと才気に、大いに期待したい。

[あいば ひろ／音楽評論家]

プロフィール

1937年、エストニア共和国の首都であるタリンに生まれた。同地で音楽を学んだ後、レニングラード音楽院にてエフゲーニ・ムラヴィンスキーに師事する。1963年から1979年までエストニア放送交響楽団（現エストニア国立交響楽団）首席指揮者の地位にあった。1971年にはローマ聖チェチーリア国立アカデミー主催の国際指揮者コンクールに優勝して国際的に知られるようになる。1982年から2004年までエーテボリ交響楽団首席指揮者を務めるかたわら、1984年から1988年までロイヤル・スコットランド・ナショナル管弦楽団首席指揮者、1990年から2005年までデトロイト交響楽団音楽監督を兼任した。その後ニュージャージー交響楽団音楽監督、ハーグ・レジデンティ管弦楽団首席指揮者、スイス・ロマンダ管弦楽団音楽・芸術監督を歴任する。2010年、音楽監督としてエストニア国立交響楽団に復帰した。NHK交響楽団との初共演は2011年11月の定期公演であった。[相場ひろ]

PROGRAM

A

第1912回

NHKホール

5/11 土 6:00pm

5/12 日 3:00pm

指揮 | エド・デ・ワールト | 指揮者プロフィールはp.4

ピアノ | ロナルド・ブラウティハム

コンサートマスター | 伊藤亮太郎

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73

「皇帝」[40']

I アレグロ

II アダージョ・ウン・ポーコ・モート

III ロンド:アレグロ、マ・ノン・トロppo

——休憩(20分)——

ジョン・アダムズ

ハルモニエーレーレ(1985) [40']

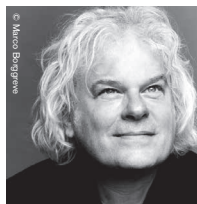
I (タイトルなし)

II アンフォルタスの傷

III マイスター・エックハルトとクエッキー

Artist Profile

ロナルド・ブラウティハム(ピアノ)



ロナルド・ブラウティハムは、モダン・ピアノとフォルテピアノの両楽器で、^{かつた}精力的で自由闊達な演奏を聴かせる名手だ。ハイティンク、ブリュッヘン、ヘレヴェッヘ、ホグウッド、ブルーノ・ワイルほかの指揮で、ヨーロッパの名門オーケストラと定期的に共演してきた。このたび、同郷オランダの名匠エド・デ・ワールトの指揮のもと、得意のベートーヴェン《ピアノ協奏曲第5番》でN響と初共演する。

1954年アムステルダムに生まれ、生地とロンドンでピアノを学んだ後、アメリカでルドルフ・ゼルキンの薫陶を受けた。しだいにフォルテピアノ演奏に情熱を傾けるようになり、モーツァルト、ハイドン、ベートーヴェンの全集を含む数多くのCDでも高い評価を受ける。モダン・ピアノでは、リッカルド・シャイー指揮ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団とのショスタコーヴィチとヒンデミット、アンドリュウ・パロツト指揮ノールショピング交響楽団とのベートーヴェン協奏曲全集などの録音がある。バーゼル音楽院

のモダン・ピアノ科教授を務め、後進の指導にもあたっている。

[青澤隆明／音楽評論家]

Program Notes | 岡部真一郎

エド・デ・ワールトは、古典からマーラー、そして現代まで、幅広いレパートリーを持ち、また、サンフランシスコやシドニーなどのポストを歴任して、「新世界」の自由な空気の中で活動を行ってきた巨匠である。自ら初演を手がけたアダムズの名作に協奏曲の歴史の金字塔たる名曲を組み合わせているあたり、その面目躍如たるものがある。

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73「皇帝」

優れたピアニストとしても名を馳^はせたルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン(1770～1827)は、《第4番》までの4曲のピアノ協奏曲をいずれも自身の独奏により世に送り出した。しかし、《第5番》に取り掛かる頃、1808年末には内外の状況は大きく変化していた。彼が暮らすウィーンはナポレオン軍の砲撃を受け、後に占領され、かたや作曲家の難聴は悪化し、次作の初演での独奏はもはや諦^{あきら}めざるを得ないとの自覚が芽生えていた。

かくなる背景の諸相は、ベルリン州立図書館所蔵の作品の自筆総譜にも刻印を残した。緩徐楽章冒頭には、オーストリアによるナポレオンへの報復を望む旨、メモがなされている。カデンツァをはじめ、細部に至るまで丹念に書き込まれた楽譜は、自らが直接、演奏に関わることができないが故のものとも考えられる。加えて、彼の最高の理解者、庇護者^{ひご}にして弟子でもあったルドルフ大公との関係をここに垣間見することもできる。

交響的な内容を持つこの作品は、非公開初演の折の独奏者、他ならぬルドルフ大公に献呈されている。管弦楽による壮大な3つの和音の響きと、それぞれに続く独奏ピアノの華やかなカデンツァによる幕開けは、《第4番》のそれにもまして独創的である。

なお、「皇帝」の愛称は後に人口に膾炙^{かいしや}するところとなったもので、上述の背景からも明らかのように、作曲家の創作とは直接の結びつきを持たない。

第1楽章はアレグロ、変ホ長調、4/4拍子、協奏的ソナタ形式。アダージョ・ウン・ポー・モート、ロ長調、2/2拍子の第2楽章は変奏曲形式。移行部を介して、終楽章へ切れ目なく続く。第3楽章はロンド：アレグロ、マ・ノン・トロppo、変ホ長調、6/8拍子、ソナタ形式。

作曲年代	1808年末～1810年
初演	[非公開初演] 1811年1月13日、ウィーン、ロブコヴィツ侯爵邸、ルドルフ大公のピアノ独奏 [公開初演] 1811年11月28日、ライプツィヒ、ゲヴァントハウス、フリードリヒ・シュナイダーの独奏
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽、ピアノ・ソロ

ハルモニレーレ (1985)

ジョン・クーリッジ・アダムズ(1947～)は、現代アメリカを代表する作曲家のひとり。ハーバード大学でキルヒナーやデル・トレディーチらに学んだ後、西海岸に居を移し、グラスやライヒらに続くミニマル・ミュージックの第2世代として、1970年代末から頭角^{あらか}を顕した。アメリカ大統領の中国訪問に材をとった《中国のニクソン》(1987)、ミレニアムを記念した《エル・ニーニョ》(2000)、原爆開発計画を扱った《ドクター・アトミック》(2005)など、鬼才セラーズとの共同作業による数々のオペラでも知られる。

《ハルモニレーレ》は1984年から翌1985年にかけて書かれ、アダムズの「出世作」のひとつとなった管弦楽曲。「和声学(Harmonielehre)」というドイツ語の題名は、シェーンベルクの同名の著作を参照したものだ。自ら「調性の作曲家」と名乗り、ことに調の間の関係性に関心があると語るアダムズの、シェーンベルクへのオマージュである。

初演者のデ・ワールトをはじめ、ラトルなどによるいくつかのディスクの他、日本初演も1986年、ナガノの指揮で行われるなど、作品は早くから広く演奏されている。

寸分の狂いも許さないほどに精緻^{せいじ}に構成された全曲は、3部からなる。

サンフランシスコのバイブリッジを運転中に目に入った巨大なタンカー。やがてそれは、ロケットのように空に飛び立つ。アーチ形の構造を持つ第1部、冒頭と結びのホ短調の和音は、作曲家自身が見た夢にインスピレーションを受けたものだという。第2部は〈アンフォルタスの傷〉。聖杯伝説、アーサー王物語、あるいは、とりわけ音楽ファンにはワーグナーの《パルシファル》を通して馴染^{なじ}みのある「アンフォルタス王の癒えることのない傷」というストーリーに、当時のアダムズは、分析心理学の創始者ユングの考察を通じ、強い関心を抱くところとなっていた。マーラー《交響曲第10番》の悲痛な和音が、楽章のクライマックスで奏でられる。静かな子守唄に始まる第3部〈マイスター・エックハルトとクエッキー〉は、再び作曲家の夢に想を得たもの。自身の生まれたばかりの娘エミリー(愛称クエッキー)が、中世ドイツの異端の神秘主義者エックハルトの肩にちょこんと^{おんちよう}とり、恩寵^{おんちよう}について囁きながら、大聖堂の天井画のごとく天空を飛翔する、というイメージに基づく。徐々にクライマックスが形成され、輝かしい変ホ長調の大きな波が全曲を締めくくる。

作曲年代	1984～1985年
初演	1985年3月21日、サンフランシスコ、エド・デ・ワールト指揮サンフランシスコ交響楽団
楽器編成	フルート4(ピッコロ3)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン1)、クラリネット4(バス・クラリネット2)、ファゴット3、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ1、マリンバ、ヴィブラフォン、シロフォン、チューブラー・ベル、クロタル、グロッケンシュピール、サスペンデッド・シンバル、シズル・シンバル、シンバル、ゴング、ベル・ツリー、タムタム、トライアングル、大太鼓、ハープ2、ピアノ、チェレスタ、弦楽

B

第1914回

サントリーホール

5/22 水 7:00pm

5/23 木 7:00pm

指揮 | ネーメ・ヤルヴィ | 指揮者プロフィールはp.6

オルガン | 鈴木優人★

コンサートマスター | 篠崎史紀

イベール

モーツァルトへのオマージュ[5']

フランク

交響曲 二短調[37']

I レントーアレグロ・ノン・トロッポ

II アレグレット

III アレグロ・ノン・トロッポ

——休憩(20分)——

サン・サーンス

交響曲 第3番 ハ短調 作品78*[35']

I アダージョーアレグロ・モデラートーポーコ・アダージョ

II アレグロ・モデラートープレストーアレグロ・モデラートープレストーマエストーソーアレグロ

Artist Profile

鈴木優人(オルガン)



鈴木優人は、チェンバロやオルガン、ピアノの演奏、指揮、作曲、プロデュースなど幅広い領域で才気を放っている。

1981年オランダのデン・ハーグに生まれ、東京藝術大学作曲科卒業後、同大学院古楽科を修了。ハーグ王立音楽院修士課程オルガン科を首席、即興演奏科を栄誉賞つきで修了し、アムステルダム音楽院のチェンバロ科でも学んだ。

2018年秋、首席指揮者に就任したバッハ・コレギウム・ジャパンでの演奏をはじめ、ソロや室内楽でも精力的に活動。ルネサンスやバロックを得意とするだけでなく、自作を含む同時代までの音楽に柔軟な感性を示す。2017年11月に指揮したモンテヴェルディの歌劇《ボッペアの戴冠》でも好評を博した。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでバロックから現代にいたるプログラムをオリジナル楽器で演奏するほか、ダンスや映像とのコラボレーションも意欲的に行う。調布国際音楽祭ではエグゼクティブ・プロデューサーとして活躍。日本とオランダで教会オルガニストも務める。

オルガニストとしては2018年11月に続くN響との共演。2019年12月定期Aプロで、指揮者としての初登場が待たれる。

[青澤隆明／音楽評論家]

Program Notes | 井上さつき

フランス音楽は19世紀末から20世紀初頭にかけて黄金時代を迎え、この間に交響曲のジャンルでも、ベルリオーズ以来、久々に傑作がいくつも生みだされた。今回はその中の2作品、セザール・フランク(1822～1890)とカミーユ・サン・サーンス(1835～1921)を並べて聞こうという意欲的なプログラム。オードブルとしてジャック・イペール(1890～1962)の軽やかな管弦楽作品が配置されている。

イペール

モーツァルトへのオマージュ

フランスの作曲家ジャック・イペールはパリ音楽院で学び、1919年作曲の《カンタータ「詩人と妖精」》でローマ大賞を受賞する。ローマ滞在中に作曲した《寄港地》(1922)などの初期の代表作により一躍有名になり、その後のフランスの楽壇で中心的な役割を果たした。

この作品は、1956年、モーツァルトの生誕200年を記念して、フランス国营放送局からの依頼で作曲された。短い単一楽章の曲で、楽器編成はモーツァルトが使っていたような古典的なものである。形式としては、18世紀に楽曲の終楽章にしばしば用いられたロンド形式(あいだに挿入部をはさんで主題が主調で何度も現れる形式)が使われている。曲想にはモーツァルトを彷彿とさせる要素が随所に織り込まれ、それがイペールならではの軽妙洒脱な色合いとブレンドされて、楽しい作品となっている。

作曲年代	1956年
初演	1956年12月4日、ウジェーヌ・ピゴ指揮、フランス国立放送管弦楽団
楽器編成	フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

フランク

交響曲 二短調

セザール・フランクはベルギーのリエージュに生まれ、フランスに帰化した作曲家、オルガニスト。1858年、パリの聖クロティルド教会のオルガニストに就任。即興演奏の名手として知られた。1872年に母校のパリ音楽院のオルガン科教授に就任すると、彼のクラス

には、オルガンの学生の他に、作曲家志望の学生が集まるようになり、門下からダンディ、ショーソン、デュパルク、ピエルネ、ルクーなど、すぐれた作曲家が輩出した。

作曲家としては遅咲きで、傑作は60歳を過ぎてから書かれたものが多い。《交響曲ニ短調》もそのひとつで、弟子たちの求めに応じて書かれた。作曲にあたっては、1887年の1月にパリで初演されたサン・サーンスの《交響曲第3番》からおおいに刺激を受けた。作品は弟子のデュパルクに献呈されている。フランク自身は作品について弟子たちに「うまくいったと思う。君たちも満足してくれると思うよ」と語っていたという。

作品は全3楽章から成り、楽章を越えて共通の主題素材が用いられ(循環形式)、全体は緊密に構築されている。

第1楽章 神秘的に始まる序奏の主題が循環主題となり、全曲を統一する。この循環主題がアレグロ主部の闘争的な第1主題の冒頭に用いられている。第2主題は力強い。

第2楽章 弦楽器とハープのピチカートによる和音から始まり、主題はイングリッシュ・ホルンによって提示される。中間部はスケルツォの性格をもち、通常の緩徐楽章とスケルツォが結合した形になっている。

第3楽章 輝かしく始まるこの楽章では、第1・2楽章の主題が回想され、第3楽章の主題とともに展開される。

作曲年代	1887～1888年
初演	1889年2月17日、ジュール・ガルサン指揮パリ音楽院管弦楽団
楽器編成	フルート2、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、コルネット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、ハープ1、弦楽

サン・サーンス

交響曲 第3番 ハ短調 作品78

フランスの作曲家カミーユ・サン・サーンスは、さまざまな分野で多くの作品を残した。完成した交響曲は5曲あるが、特に有名なものが、ロンドン・フィルハーモニー協会の委嘱作である最後の《交響曲第3番》で、1886年5月のロンドン初演も、翌年のパリ初演も成功を収めた。パリ初演の折、感激したシャルル・グノーは、指揮台を降りて楽屋に戻るサン・サーンスを見て「フランスのベートーヴェンが行く!」と叫んだという。

作品には「F. リストの思い出に」という献辞が添えられているが、これは、初演の2か月あまり後に亡くなったリストを追悼して、出版の際に加えられたものである。サン・サーンスはリストを深く尊敬し、交響詩の作曲をはじめ、さまざまな面で影響を受けていた。

「オルガン付き」というニックネームがついていることから分かるように、楽器編成にはオルガンやピアノが加えられているのが特徴のひとつで、サン・サーンスの精妙な管弦楽法によって、華麗で繊細な音の世界が広がっている。

曲は2楽章構成だが、内容的にはそれぞれの楽章が、通常の2つの楽章をまとめた形をとっている。全曲を通じて循環主題が随所に用いられ、作品の構築性を高めている。

第1楽章 第1部 序奏に続いて、16分音符で刻まれて始まる第1主題と、その一部から派生した循環主題が提示された後、第2主題が現れる。

第1楽章 第2部 オルガンに導かれて、弦楽器が甘美な主題を奏でる。

第2楽章 第1部 スケルツォ的な部分。

第2楽章 第2部 オルガンのハ長調の主和音の強奏が鳴り響くなか、荘厳な主題が対位法的に扱われ、続いて、循環主題がピアノの分散和音を伴って現れる。やがて、循環主題をもとにした第1主題と、表情豊かな第2主題、さらに序奏部の主題を中心に曲は壮大に展開し、最後はハ長調の主和音の上に全曲が華々しく閉じられる。

作曲年代	1885～1886年
初演	1886年5月19日、ロンドン、作曲者自身の指揮、ロンドン・フィルハーモニー協会管弦楽団 [パリ初演]1887年1月9日、ジュール・ガルサン指揮、パリ音楽院演奏協会
楽器編成	フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、トライアングル、オルガン1、ピアノ1(4手連弾)、弦楽

PROGRAM

C

第1913回

NHKホール

5/17 金 7:00pm

5/18 土 3:00pm

指揮 | ネーメ・ヤルヴィ | 指揮者プロフィールはp.6

コンサートマスター | 伊藤亮太郎

シベリウス

アンダンテ・フェスティヴォ [5']

トゥビン

交響曲 第5番 口短調 (1946) [30']

I アレグロ・エネルジコ

II アンダンテ

III アレグロ・アッサイ

—— 休憩 (20分) ——

ブラームス

交響曲 第4番 ホ短調 作品98 [41']

I アレグロ・ノン・トロツポ

II アンダンテ・モデラート

III アレグロ・ジョコーソ

IV アレグロ・エネルジコ・エ・パッショナート

Program Notes | 神部 智

N響首席指揮者パーヴォの父ネーメ・ヤルヴィは、エストニア音楽界を長く牽引^{けんいん}してきた大指揮者。膨大なレコーディングで知られ、隣国フィンランドのシベリウス(1865～1957)や母国のトゥビン(1905～1982)の全交響曲をはじめ、20世紀音楽も数多く録音している。そのシベリウス、トゥビンに加え、ブラームス(1833～1897)の最後の交響曲を取り上げる今回のプログラムでは、まさにいぶし銀のような表現世界が味わえるだろう。

シベリウス

アンダンテ・フェスティヴォ

本作は、フィンランドのサウナトゥサロ製作所が25周年記念式典の折、ジャン・シベリウスに祝祭的な作品を委嘱したことで生まれた弦楽四重奏曲。発表から16年後の

1938年、アメリカにラジオ中継するため、曲は弦楽合奏用へと改編された。なお、作曲者がフィンランド放送交響楽団を振ったこのラジオ中継は録音され、シベリウス唯一の自作指揮として世界中で愛聴されている。作品は短編だが、天空に大きな弧を描くような旋律、オルガンの響きを思わせる透明な和声の特徴とし、晩年期シベリウスの清澄な世界観を反映しているかのようだ。

作曲年代	[弦楽四重奏版]1922年 [弦楽合奏版]1938年
初演	[弦楽四重奏版]1922年12月28日 [弦楽合奏版]1939年1月1日、作曲者自身の指揮、フィンランド放送交響楽団
楽器編成	ティンパニ1、弦楽

トゥビン

交響曲 第5番 口短調(1946)

エドゥアルド・トゥビンは、エストニアを代表する20世紀の作曲家である。第2次世界大戦中の1944年、隣国ソビエトがエストニアを占領。それに激しく抵抗したトゥビンはただちにスウェーデンへ渡り、同地で創作活動が続けながら77歳の生涯を閉じた。そのためトゥビンを「歴史に^{ほんろう}翻弄された悲劇の作曲家」、「望郷の作曲家」と見る向きもある。

トゥビンの作品が広く世界に知られるようになったのは、作曲者と親交のあった指揮者ネーメ・ヤルヴィをはじめ、同郷エストニアの優れた理解者(演奏家)に恵まれたからだろう。トゥビンの作風は、エストニアの民俗音楽から影響を受けつつも、より抽象化された響きの内に厳しい造形美を求めるものである。その妥協を許さない表現世界、中でもスウェーデン移住後のそれは、不条理な社会に対する激しい「怒り」あるいは「抗議」のような側面を合わせ持っている。

幅広いジャンルで数多くの作品を残したトゥビンだが、10曲の交響曲(《第11番》は未完)は彼の創作の集大成といってよい。その内、《第4番》と《第8番》は全4楽章、《第9番》は全2楽章、《第10番》は単一楽章で、それ以外の6曲はすべて3楽章制をとる。1946年に完成した《第5番》は、トゥビンがエストニアの民謡を直接引用した唯一の交響曲であり、とりわけ名作の^{ほま}誉れが高い。

第1楽章は弦楽器による冒頭のリズミカルな主題を中心に、2台のティンパニと金管が強烈なアクセントを加えながらドラマチックに展開していく。緩やかな第2楽章は、一転して叙情的な調べが印象的。第3楽章は緊張感に満ちた曲調が続き、やがて弦楽による神秘的な旋律が静かに現れると、最後はティンパニが主導しながら巨大なクライマックスを形成して幕を下ろす。

作曲年代	1946年
初演	1947年11月16日、カルル・ガラグリ指揮、ロイヤル・ストックホルム・フィルハーモニー管弦楽団
楽器編成	フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ2、シンバル、小太鼓、弦楽

ブラームス

交響曲 第4番 ホ短調 作品98

創作晩年期を迎えたブラームスの精神が、きわめて鮮明に現れた傑作交響曲。《第4番》はブラームスが創作した最後の交響曲であり、《第3番》(1883)のわずか2年後に発表された作品だが、両曲の音調は大きく異なる。《第4番》で特に注目されるのは、第2楽章の擬古的な教会旋法(フリギア調)の活用と、第4楽章におけるパッサカリア(バロック時代に用いられた変奏曲形式のひとつ)の応用であり、伝統的な音楽様式に敬意を払いつつも、あえて過去との対決をとおして新しい表現を切り開こうとしたブラームスの本領が存分に発揮された交響曲、といえるだろう。

ブラームスの《第4番》は、交響曲としては珍しくホ短調が用いられている。後にチャイコフスキー《第5番》(1888)やドヴォルザーク《第9番「新世界より」》(1893)、ラフマニノフ《第2番》(1908)などが同じ調性で書かれるが、その先駆けとなったブラームスの交響曲はホ短調の「哀愁的なイメージ」を決定的にしたといつてよい。

第1楽章は、メランコリックな詩情をたたえた第1主題が印象的なソナタ形式による。第2楽章は歌心に満ちた重厚な緩徐楽章。第3楽章は、スケルツォ風の豪快な曲想が特徴。そして最後を飾る第4楽章は、ブラームスの優れた作曲技法が見事に凝縮された変奏曲で、その主題はバッハのカンタータから借用されている。

作曲家自身の指揮による初演にも関わった若きリヒャルト・シュトラウスは、初演の前日(1885年10月24日)、父への手紙に次のような興味深い言葉を残している。「《第4番》は間違いなく巨匠の音楽です。とてつもない発想、創作力。形式の扱いと長編に対する構想力は、まさしく天才的です。並外れた力強さ、そして新鮮で独創的。この驚くべき作品は、どこから見ても正真正銘のブラームスなのです」。

作曲年代	1884～1885年
初演	1885年10月25日、作曲家自身の指揮、マイニンゲン宮廷管弦楽団
楽器編成	フルート2(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、トライアングル、弦楽

N響百年史

Prologue

第三回 ― オークストラで不平等条約を解消せよ！ 片山杜秀 ― Morihide Katayama

今年にはNHK交響楽団の前身となる新交響楽団結成から九三年。来るべき創立百周年に向け、NHK・FM「クラシックの迷宮」のパーソナリティとしてもお馴染みの思想史研究者で音楽評論家の片山杜秀さんが、N響の歴史を時代背景とともに、独自の視点でひもときます。二〇一八／二〇一九シーズンは「Prologue」として、幕末から筆を起し、大正末年になって本格的プロ・オーケストラが誕生するまでの時代の流れを描きます。

オーケストラ付き舞踏会外交の
舞台となった鹿鳴館

ろくめいかん

鹿鳴館。二階屋の洋館である。東京の日比谷に明治政府が建てた。落成したのは1883（明治16）年7月のこと。着工から3年かかっている。それから1887（明治20）年頃までを、鹿鳴館時代と呼ぶ。そこに月に何度も舞踏会が開かれた。招かれるのは西洋諸国の人人々。外交官に商人。明治政府の要人や夫人たちが接待役を務める。

パーティは、およそ午後9時に始まり、夜の白むまで続く。踊られるのは、まずは優雅なワルツやカドリユ。締めはポルカ。踊り疲れて、食事やおやつやお酒の休憩時間になれば、合図の音楽はポロネーズ。一同はポロネーズに乗って、舞踏会場の大広間から食堂へと移動する。気持ちよく歓談でもしながらゆったり歩いてゆく際のBGMに、^{おうよう}鷹揚としたポロネーズのテンポとリズムがよく合った。

いずれにせよ、舞踏会は舞曲なしには始まらない。演奏はどうしていたか。吹奏楽だけの日もあれば、管弦の合奏のときもあり、ピアノも用いられていたという。演奏者は原則として日本人。^{おやとい}御雇外国人の楽士ではない。陸海軍の軍楽隊、あるいは、楽器を西洋楽器に持ち替えた宮中の雅楽の演奏家たちが、パーティのたびに動員された。いつも20人以上の楽士がいたと伝えられる。それなりのオーケストラの規模である。

はて、皇居も官庁街もほど近い日比谷の鹿鳴館で、明治の16年から20年まで月に幾夜も、主に西洋人賓客^{ひんきやく}を接待するための政府主催の舞踏会が、なぜに催されねばならなかったのか。明治国家の要人たちが贅沢^{ぜいたく}をしたかったからか。栄耀^{えいよう}栄華^{えいが}を内外に誇示した

かったというのか。

そうではあるまい。維新聞もない国家の財政は、いつも火の車であった。栄耀栄華どころではなかった。それなのに、無い袖を振って、遊興の限りを尽くす。日本人にはまだまだ不慣れな西洋クラシック音楽を生演奏し、その伴奏で舞い踊る。

板に付かない真似をするな！ 反政府の立場をとる自由民権運動家や国粋主義者たちは、鹿鳴館を罵倒した。国辱であり国恥であると言った。だが、明治政府は、恥を忍び、なけなしの錢をはたいても、舞踏会を行い続けた。それだけの政治的理由があった。西洋諸国とのあいだの不平等条約を改正する。対等で平等な条約を結び直す。明治政府の維新以来の根本課題である。そのために鹿鳴館での「オーケストラ付き舞踏会外交」は有効と考えられていた。

不平等な条約を結んだのはいったい誰か。江戸幕府である。和親条約に通商条約。ペリー来航以来、アメリカともイギリスともフランスともロシアとも、その他の西洋諸国とも、幕府は政治的・経済的関係を築いていった。それこそが日本の生き残る道と信じた。その点では、幕府を倒して成立した明治政府も同様である。

だが、結んだ条約は、外国人が日本で罪を犯しても日本の法で裁けず、貿易をすれば関税自主権がないので外国人にいいように売り買いされてしまうといった内容だった。外交経験に乏しかった江戸幕府が、諸外国に騙され、不利な条約に調印してしまったのか。いや、違う。「文明国標準」という西洋諸国の勝手に定めた決まり事が、国際法の名を借りて、大手を振って練り歩いていたのが、19世紀の世界の現実だった。対等の文明国と認められ

ないと、対等の条約は結べない。それがしきりだった。

ここで言う文明とは、西洋には西洋の、東洋には東洋の、それぞれの文明があるから対等に認め合うべきというような、物分かりのよい話ではない。当時の西洋諸国の外交は、西洋文明が唯一の「文明」であって、それ以外の文明は文明の名に値しない「野蛮」であるという前提に基づいていた。

腰に刀を差した侍なる特殊な階級が存在し、京都の天皇と江戸の将軍のどちらに国家意思の決定権があるのかもよくわからず、藩ごとに領地が細かく分割されて交通の自由もないような国の、どこが文明国なのか。そう判断された。よって、江戸幕府は不平等条約しか結ばせてもらえなかった。

ここでの文明という概念には、文化も込みになっている。水墨画や浮世絵や伊万里焼。教養ある西洋人を感嘆させる日本の文物はいくらもあった。けれど、それらは「文明国標準」のポイントにはならない。遅れた国にも、それなりの値打ちが認められる独自文化は存在する。それだけの話にすぎない。「文明国標準」の文明とは、あくまで西洋近代文明である。

当時の日本にもそのことは骨の髄までしみていた。明治維新のスローガン「文明開化」とは西洋文明化以外を意味しない。しかも「文明開化」は軍事や法制度、経済や社会の仕組みの導入だけではすまない。髷を落として、帯刀をやめ、着物を洋服に替えるだけでは足りない。西洋人の眼に日本が「文明国」に映るためには、日本人もワルツを踊り、五線譜を読み、西洋楽器を演奏し、オーケストラを組織できなければならない。雅楽や能や歌舞伎ではダメなのだ。その頃の西洋人の多数派から見れば、それらも原始的で野蛮な範疇に属していた。



ようしゆうちかのぶ きけん
楊州周延画『貴顕舞踏の略図』。鹿鳴館での舞踏会を描いた浮世絵 | 神戸市立博物館蔵

音楽取調掛設置も 文明開化を示すため

鹿鳴館の建設を主導したのは、1879(明治12)年に外務卿に就任した、長州出身の井上馨である。前任の外務卿は薩摩出身の寺島宗則。彼は、明治維新以来のそれなりの「文明化」の成果を盾に条約改正交渉にあたったが、西洋諸国から相手にされず、行きづまった。ならばと、後任の井上は、日本人の立派な「文明化」の実を、向こうの外交官相手に目の当たりに実感させようとした。そこで編み出されたのが鹿鳴館である。日本人がワルツやカドリユーを自ら演奏して踊る空間だ。よく訓練された20人以上もの日本人の楽団が長時間、西洋クラシック音楽を演奏し続ける場所だ。

井上馨に条約改正交渉の続きを委ねた寺島宗則はというと、外務卿から転じて文部卿になった。その寺島文部卿時代に文部省に新設されたセクションが、音楽取調掛である。それは、日本の義務教育に西洋音楽をどのよ

うに取り入れるかを研究し実践する組織だ。そして、西洋クラシック音楽の演奏や教育に携わる模範的・指導的人物の養成所でもある。

日本の国民に幼少期から西洋音楽を教育し、日本人みなが五線譜を読み、西洋風の歌を正しく歌えるようにする。そうして、日本国民全般を音楽文化面において「文明国標準」に、一刻も早く到達させる。音楽取調掛はそのための実験場であり、西洋クラシック音楽に関する明治政府内の最高機関でもある。そこにはもちろんオーケストラも作られねばなるまい。西洋の外交官が音楽取調掛を見学に来て、「オーケストラはどこで練習していますか」と尋ねられたとき、返答に窮しないように。

音楽取調掛設置から8年後の1887(明治20)年2月19日、音楽取調掛の新卒業生によるオーケストラが、御雇外国人ギヨーム・ソーヴレットの指揮でベートーヴェンの《交響曲第1番》を演奏した。全部の楽章ではなく、しかも編成も簡略化されていたと言われるが、とにかく日本人によるベートーヴェンの交響曲演



音楽取調掛最初の全科卒業生・助教・伝習生。1885(明治18)年7月20日。後列左から5人目の帽子の女性が助教の瓜生繁(日本初のピアノ教授とされる)。前列左から3人目が卒業生の幸田延(幸田露伴の妹)。後に東京音楽学校教授として瀧廉太郎、山田耕筰らを育てる) | 東京藝術大学音楽学部大学史料室蔵

奏事始めであろう。その翌々月の4月には、鹿鳴館ではなく首相官邸で、伊藤博文総理大臣が主催する大仮装舞踏会が開催された。招待客は400人に及び、楽団も大規模。伊藤博文はベネチアの貴族に仮装してパーティをリードしたと伝えられる。総理自らが西洋人に化けて、ワルツやカドリユを踊る。「文明開化」の果ての果て。条約改正を夢見ての必死のパフォーマンスだった(不平等条約の解消は最終的には明治の末までかかるのだが)。同じ1887年の秋、音楽取調掛は東京音楽学校になる。現在の東京藝術大学音楽学部である。

日本のオーケストラの歴史は、日本人が西洋クラシック音楽を聴きたかったから始まった

とは言いにくい。軍隊における訓練上の必要性(陸海軍軍楽隊)、宮中での外国賓客^{きょうおう}饗応のための需要(雅楽の楽人による西洋式オーケストラ)、そして、「文明国標準」の達成度を世界に誇示しようとした明治政府の涙ぐましい努力。以上の三本の矢が、やはり起動力であつたろう。そこにはまだ市民はいない。

文 | 片山杜秀(かたやま もりひで)

思想史研究者、音楽評論家。慶應義塾大学法学部教授。2008年、『音盤考現学』『音盤博物誌』で吉田秀和賞、サントリー学芸賞を受賞。『平成音楽史』(共著)、『クラシックの核心』『ゴジラと日の丸』『近代日本の右翼思想』『未完のファシズム』『見果てぬ日本』『五箇条の誓文』で解く日本史』ほか著書多数。

次回予告

次回(2019年6月号掲載予定)は明治末期に生まれた少年音楽隊や大学オーケストラの果たした役割を、西洋の状況と比較しながら論じます。

Overview

6月定期公演

首席指揮者 パーヴォが鮮やかに
今シーズンの掉尾を飾る

6月定期公演は首席指揮者パーヴォ・ヤルヴィが3つのプログラムを披露する。

Aプロは19世紀末から20世紀はじめのほぼ同時期に書かれた2つの作品、マーラー《こどもの不思議な角笛》とニルセン《交響曲第2番「4つの気質」》が並ぶ。《こどもの不思議な角笛》ではマティアス・ゲルネの美声と知的な歌唱が聴

きもの。《4つの気質》は胆汁質、粘液質、憂鬱質、多血質という古代ギリシアの人間の気質分類に基づく一風変わった交響曲。作風は明快で、両端楽章は力強い躍動感にあふれる。

Bプロではメシアンの大作、《トゥランガリラ交響曲》が演奏される。高い技巧を誇り、メシアン作品の演奏に定評のあるロジェ・ムラロのピアニ、この曲の豊富な演奏経験を持つシンシア・ミラーのオンド・マルトノを迎え、パーヴォとN響のコンビが鮮烈な響きの芸術を築きあげる。

Cプロは19世紀末から20世紀前半にかけてのウィーンゆかりの作曲家たちの作品が集められた。共通項は先人へのリスペクト。ウェーベルンはバッハの《音楽のささげもの》から〈リチェルカータ〉を独自の手法で管弦楽化し、ベルクはバッハの主題を《ヴァイオリン協奏曲》に引用し、ブルックナーは《交響曲第3番》を敬愛するワーグナーに捧げた。ベルク作品では名手ギル・シャハムのソロに注目が集まる。

[飯尾洋一／音楽ジャーナリスト]

A

6/8 土 6:00pm

6/9 日 3:00pm

NHKホール

マーラー／こどもの不思議な角笛*

ニルセン／交響曲 第2番 口短調 作品16「4つの気質」

指揮：パーヴォ・ヤルヴィ

バリトン：マティアス・ゲルネ*

B

6/19 水 7:00pm

6/20 木 7:00pm

サントリーホール

メシアン／トゥランガリラ交響曲

指揮：パーヴォ・ヤルヴィ

ピアノ：ロジェ・ムラロ

オンド・マルトノ：シンシア・ミラー

C

6/14 金 7:00pm

6/15 土 3:00pm

NHKホール

バッハ（ウェーベルン編）／リチェルカータ

ベルク／ヴァイオリン協奏曲「ある天使の思い出のために」

ブルックナー／交響曲 第3番 二短調（第3稿／1889）

指揮：パーヴォ・ヤルヴィ

ヴァイオリン：ギル・シャハム

PROGRAM

A**Concert No.1912 NHK Hall****May****11(Sat) 6:00pm****12(Sun) 3:00pm**

conductor | **Edo de Waart**piano | **Ronald Brautigam**concertmaster | **Ryotaro Ito**

Ludwig van Beethoven
Piano Concerto No. 5 E-flat Major
Op. 73 "Emperor" [40']

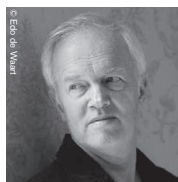
- I Allegro
- II Adagio un poco moto
- III Rondo: Allegro, ma non troppo

—intermisson (20 minutes)—

John Adams
Harmonielehre (1985)
[40']

- I (untitled)
- II The Anfortas Wound
- III Meister Eckhardt and Quackie

Artist Profiles

Edo de Waart, conductor

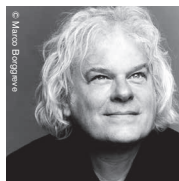
Edo de Waart was born in Holland in 1941. He studied oboe, piano and conducting, and joined the Concertgebouw Orchestra Amsterdam (presently known as the Royal Concertgebouw Orchestra) in 1963 as an oboe player. After winning the Dimitri Mitropoulos Conducting Competition in New York in 1964, he served as assistant conductor to Leonard Bernstein at the New York Philharmonic.

He then gained experience in conducting under Bernard Haitink at the Concertgebouw Orchestra. In the following years, he was continuously appointed positions of Music Director or Principal Conductor of the Rotterdam Philharmonic Orchestra, the San Francisco Symphony, the Minnesota Orchestra, the Netherlands Radio Philharmonic Orchestra, the Sydney Symphony Orchestra, the Hong Kong Philharmonic Orchestra, the Milwaukee Symphony Orchestra and the Royal Flemish Philharmonic (the Antwerp Symphony Orchestra). He is currently Music Director of the New Zealand Symphony Orchestra, and he has been

named by the San Diego Symphony Orchestra as its Principal Guest Conductor beginning from the 2019/20 season.

In addition to enjoying a successful career as a concert conductor, he has also been making remarkable strides in the operatic field, having served as Chief Conductor of Netherlands Opera and making guest appearances worldwide. He has worked with the NHK Symphony Orchestra frequently since April 2009.

Ronald Brautigam, piano



Ronald Brautigam is a master of both modern piano and fortepiano, with highly energetic, open and free performances. He has worked with prestigious European orchestras on a regular basis under the baton of Bernard Haitink, Frans Brüggen, Philippe Herreweghe, Christopher Hogwood and Bruno Weil, to name a few. On his first collaboration with the NHK Symphony Orchestra, he will be playing

Piano Concerto No. 5 by Beethoven, his favorite composer, under the baton of Edo de Waart, his Dutch compatriot.

Ronald Brautigam was born in Amsterdam in 1954, and after studying the piano in his native city as well as in London, he underwent the tutelage of Rudolf Serkin in the United States. He gradually felt an inclination to put his heart into fortepiano. Many of the CDs he has recorded including the complete works of Mozart, Haydn and Beethoven have won high artistic acclaim. His modern piano discography includes Shostakovich and Hindemith concertos with the Royal Concertgebouw Orchestra under Riccardo Chailly, and Beethoven piano concerto complete with the Norrköping Symphony Orchestra under Andrew Parrott. He teaches modern piano as a professor at the Musik-Akademie der Stadt Basel with the goal of fostering young artists.

[Edo de Waart by Motoyuki Teranishi, music critic, Ronald Brautigam by Takaakira Aosawa, music critic]

Program Notes | Akira Ishii

Ludwig van Beethoven (1770–1827)

Piano Concerto No. 5 E-flat Major Op. 73 “Emperor”

Beethoven’s Piano Concerto No. 5 in E-flat Major, Op. 73 was composed between 1808 and 1810. It is a revolutionary piece, featuring many elements unheard of in other similar compositions of the time. In the beginning of the first movement, for instance, Beethoven lets the solo piano enter right away after the very first chord played by the full orchestra. Here the piano part is explicitly written out, but the composer clearly intends it to be an improvisational cadenza-like section. It is filled with soloistic passages, with which the pianist can immediately exhibit his/her virtuosity. Beethoven has asked the piano to play alone at the

A

11 & 12, MAY 2019

start of his previous piano concerto (Piano Concerto No. 4 in G Major, Op. 58). There, however, the piano plays only a five-measure-long main theme, which lacks any cadenza quality. Perhaps the reason why Beethoven wrote the improvisational passages in the opening measures of the fifth concerto is that he still wished to perform the solo part at its premiere, even though his difficulty in hearing was making it impossible for him to play with orchestra. Piano Concerto No. 5 is a truly grandioso piece, consisting of three movements, of which the last two are performed without an interruption.

John Adams (1947–)

Harmonielehre (1985)

In an interview for the June 2008 issue of *Gramophone* John Adams says, “I don’t think you can be a great composer unless you have a feeling for harmony.” These words may reflect his intentions for composing *Harmonielehre*. The title is in German, meaning “treatise on harmony.” It is curious that an American composer writes a piece of music and names it using words in a foreign language without referring to English equivalents. The title derives from a music theory textbook of the same name by Arnold Schönberg, a progressive composer who had a keen interest in atonality and developed the twelve-tone technique in the early twentieth century. Adams had a certain degree of respect for Schönberg, with whom Adams’ composition teacher at Harvard, Leon Kirchner, studied in the 1940s. Through Kirchner Adams came to appreciate Schönberg’s serious attitude toward creating music. At the same time, however, for Adams Schönberg is a sort of evil figure who destroyed classical music. Adams says, “It was with Schönberg that the ‘agony of modern music’ had been born, and it was no secret that the audience for classical music during the twentieth century was rapidly shrinking, in no small part because of the aural ugliness of so much of the new work being written.”

Adams’ *Harmonielehre* was composed between 1984 and 1985. It premiered on March 21, 1985 in San Francisco, with Edo de Waart conducting the San Francisco Symphony. The work is written for a large orchestra, calling for four flutes (the second, third, and fourth doubling piccolo), three oboes (the third doubling English horn), four clarinets (the third and fourth doubling bass clarinet), three bassoons, contrabassoon, four French horns, four trumpets, three trombones, two tubas, timpani and a variety of percussion instruments, piano, celesta, two harps, and strings. It consists of three movements, of which the second and the third are titled “The Anfortas Wound” and “Meister Eckhardt and Quackie.” According to Adams, the composition “marries the developmental techniques of Minimalism with the harmonic and expressive world of *fin de siècle* late Romanticism.” The opening movement begins with a repeatedly played single chord, which comes back towards the end of the movement. One of the two climatic points of the second movement is in the composer’s words, “an obvious homage to Mahler’s last, unfinished symphony.” The third movement is inspired by a dream that Adams had about his infant daughter, whom he had nicknamed “Quackie.”

Akira Ishii

Professor at Keio University. A Visiting Scholar at the Free University Berlin between 2007 and 2009. Holds a Ph.D. in Musicology from Duke University (USA).

PROGRAM

B

Concert No.1914 **Suntory Hall**

May

22(Wed) 7:00pm

23(Thu) 7:00pm

conductor | **Neeme Järvi**

organ | **Masato Suzuki***

concertmaster | **Fuminori Maro Shinozaki**

Jacques Ibert

Hommage à Mozart [5']

César Franck

Symphony D Minor [37']

I Lento—Allegro non troppo

II Allegretto

III Allegro non troppo

—intermission (20 minutes)—

Camille Saint-Saëns

Symphony No. 3 C Minor Op. 78*

[35']

I Adagio—Allegro moderato—Poco adagio

II Allegro moderato—Presto—

Allegro moderato—Presto—Maestoso—Allegro

B

22 & 23, MAY 2019

Artist Profiles

Neeme Järvi, conductor



Neeme Järvi was born in the Estonian capital of Tallinn in 1937, and after studying music there, he studied under the tutelage of Evgeny Mravinsky at the Leningrad Conservatory. From 1963 to 1979, he held the position of Principal Conductor of the Estonian Radio Symphony Orchestra (presently the Estonian State Symphony Orchestra). In 1971, he won the International Conductors Competition at the

Accademia Nazionale di Santa Cecilia in Rome, after which he became known internationally. From 1982 to 2004, he was Principal Conductor of the Gothenburg Symphony Orchestra, while serving as Principal Conductor of the Royal Scottish National Orchestra from 1984 to 1988, and Music Director of the Detroit Symphony Orchestra from 1990 to 2005. He

then assumed the positions of Music Director of the New Jersey Symphony Orchestra, Chief Conductor of the Residentie Orchestra of The Hague and Artistic and Music Director of the Orchestre de la Suisse Romande. In 2010, he reunited with the Estonian State Symphony Orchestra as its Music Director.

He first worked with the NHK Symphony Orchestra in its November subscription concert in 2011.

Masato Suzuki, organ



Masato Suzuki has been displaying his ingenuity in a wide range of fields from performances of harpsichord, organ and piano, to conducting, composing and producing.

He was born in The Hague in 1981, and studied composition at Tokyo University of the Arts and early music at the postgraduate level of the same university. He went on to study organ at the Royal Conservatory in The Hague, graduating at the top of the class, and improvisation, graduating with honors. He also studied harpsichord at the Amsterdam Conservatory.

In addition to performing solo and chamber music, he has been energetically engaged in performing with and conducting the Bach Collegium Japan, of which he assumed the post of Principal Conductor in autumn of 2018. He displays his flexible sensitivity not only with music from the Renaissance to the Baroque periods, which are his forte, but also with contemporary works including his own compositions. Monteverdi's *L'incoronazione di Poppea*, which he conducted in November 2017, won artistic acclaim. He performs a wide range of programs from Baroque to contemporary using original instruments with the Ensemble Genesis, where he serves as Music Director, and actively incorporates dancing and visuals into his performances. He is versatile, serving as Executive Producer of the Chofu International Music Festival, composing works and overseeing stage direction. He is also a church organist both in Japan and the Netherlands.

This is his second appearance as an organist since November 2018. His first appearance as a conductor in Program A of the December 2019 is also most awaited.

[Neeme Järvi by Hiro Aiba, music critic, Masato Suzuki by Takaakira Aosawa, music critic]

Program Notes | Akira Ishii

Jacques Ibert (1890–1962)

Hommage à Mozart

Jacques Ibert was one of many outstanding French composers of the early twentieth century, who wrote a large number of compositions in various genres of music. In 1910 Ibert began to study composition at the Paris Conservatory, but his studies were soon interrupted by the outbreak of World War I. After the war Ibert won in 1919 the *Prix de Rome* for

Musical Composition, the top scholarship prize for young composers provided by the French government, and went to Rome to further his studies.

Commissioned by French National Radio, Ibert wrote *Hommage à Mozart* in 1956 to commemorate the two-hundredth anniversary of Mozart's birth (Ibert was then the General Administrator of the *Réunion des Théâtres Lyriques Nationaux*, which was responsible for the management of the Paris Opera and *Opéra-Comique*). The composition is relatively short; it takes approximately five minutes to perform. Ibert's way of remembering Mozart is quite unique. Ibert incorporates no known melodies written by Mozart; instead, he calls for a typical eighteenth-century size orchestra, adopts a musical form that was prevalent in Mozart's time, and imitates harmonic and rhythmical structures of the Classical period.

César Franck (1822–1890)

Symphony D Minor

Born in Liège in today's Belgium, César Franck spent most of his adult life in Paris. Franck was already in the French capital in 1835 to receive music lessons, entering the Paris Conservatory in 1837. In the following year he successfully finished his studies in piano, but he remained at the music school until 1842 for the purpose of polishing his skills in organ and composition. After a brief return to Belgium, Franck obtained the post of assistant organist in Paris in 1847. This led him to have a series of organ positions, eventually becoming an organist at the Sainte-Clotilde church in the French capital in 1858. He remained there until his death in 1890. In 1872 Franck was appointed as Professor of organ at the Paris Conservatory. In recognition of his achievements he was made a Chevalier of the French *Légion d'honneur* in 1885.

Franck was an active organist throughout his professional career, but this did not prevent him from composing music. He consistently wrote pieces for organ as well as for chorus. After he began teaching at the Conservatory, he became more involved with creating music. Nearly all of his orchestral pieces were indeed written after the year 1873 — he even taught composition to his organ students beyond the framework of organ pedagogy (Franck was never appointed as a professor of composition).

Franck's Symphony in D Minor was composed between 1887 and 1888. It was one of his last works. The premiere took place on February 17, 1889, a year before he died. The symphony is scored for a modest-size orchestra, calling for two flutes, two oboes, English horn, two clarinets, bass clarinet, two bassoons, four horns, two cornets, two trumpets, three trombones, tuba, timpani, harp, and strings. The composition consists of three movements, utilizing a so-called cyclic structure. Pieces constructed around this compositional concept contain a melody that keeps appearing throughout the work to create a sense of unity. In the case of Franck's Symphony in D Minor, a simple tune marked *piano* at the very beginning of the piece, played by violas, cellos, and basses, serves as the cyclic theme.

Camille Saint-Saëns (1835–1921)

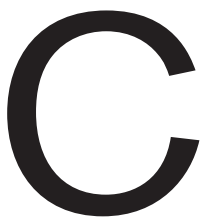
Symphony No. 3 C Minor Op. 78

In the first half of the nineteenth century, French composers and the audience alike did not pay much attention to symphonies, especially those that lacked programmatic elements.

Concert life in Paris had been extremely active since the early eighteenth century, and numerous composers, both French and foreign came to the city to make their names known. As a result, symphonies were very much popular there, particularly towards the end of the eighteenth century. A countless number of pieces were published, and anyone who wished to obtain them could readily purchase the printed parts of them. The musical taste of the French audience, however, changed rapidly in the early nineteenth century. It was not until late in the century that French composers began to write symphonies regularly.

Camille Saint-Saëns' Symphony No. 3 in C Minor, Op. 78, perhaps the most popular of the Romantic French symphonies, was composed between 1885 and 1886. It premiered in London on May 19, 1886 under the direction of the composer himself — the work had been commissioned by the Royal Philharmonic Society there. Its first French performance took place the following year in Paris on January 9. Saint-Saëns' third symphony was the last of five such works by him (there also are two unnumbered symphonies). Incidentally, all of his symphonies except for Symphony No. 3 were written in the 1850s when he was relatively young.

The unique feature of Saint-Saëns' Symphony No. 3 is the inclusion of a full-scale organ in the orchestra. The work consists of two movements, each comprising two contrasting sections. The first movement opens with a brief slow introduction, followed by the first main theme constructed with fast moving notes. The section is written in a manner somewhat similar to the beginning of Mendelssohn's *A Midsummer Night's Dream* overture. The organ initiates the second part of the first movement, setting up a peaceful and solemn mood that dominates the entire movement. The first half of the second movement is filled with motives full of rapid notes. Included here is a swifter version of the main theme of the first movement. The final section of the movement begins with a full C major chord played by the brilliantly sounding organ, which leads to the magnificent ending of the composition.



Concert No.1913 NHK Hall

May

17(Fri) 7:00pm

18(Sat) 3:00pm

conductor | **Neeme Järvi** | for a profile of Neeme Järvi, see p.43

concertmaster | **Ryotaro Ito**

Jean Sibelius

Andante festivo [5']

Eduard Tubin

Symphony No. 5 B Minor (1946) [30']

I Allegro energico

II Andante

III Allegro assai

—intermission (20 minutes)—

Johannes Brahms

Symphony No. 4 E Minor Op. 98 [41']

I Allegro non troppo

II Andante moderato

III Allegro giocoso

IV Allegro energico e passionato

Program Notes | Akira Ishii

Jean Sibelius (1865–1957)

Andante festivo

Jean Sibelius' *Andante festivo* is a five-minute long, single-movement composition. It was written in 1922 to celebrate the twenty-fifth anniversary of sawmills in Säynätsalo, a former municipality in Finland. It had been scored for string quartet, but Sibelius re-orchestrated it in 1938, calling this time for strings and timpani. The string orchestra version premiered on January 1, 1939, with the composer himself conducting the Finnish Radio Symphony Orchestra in a live broadcast.

The dynamic marking of the beginning of *Andante festivo* is forte. The loudness required here, however, is not by any means typical. The opening notes of the cellos, for instance, are in an extremely high register (the double basses remain silent during much of the first phrase), and the violins and violas also play notes in the soprano range. This sonority is kept throughout the composition, making the piece sound solemn as well as heavenly.

Symphony No. 5 B Minor (1946)

Eduard Tubin was born in Torila, a village in what is today Estonia. In 1924 Tubin was admitted to the Tartu Higher Music School in Tartu, the second largest city in Estonia, to study composition with Heino Eller, who had been appointed as Professor of music theory and composition only four years prior to Tubin's entering the school. After graduating in 1930, Tubin worked as an orchestra and choir conductor, accompanist, and composer. In 1944 the Soviet Union occupied Estonia, and the composer decided to leave for Stockholm, where he eventually obtained Swedish citizenship in 1961. Tubin wrote a fair amount of music, including two operas, two ballets, ten symphonies, two violin concertos, a piano concerto, a double bass concerto, and several chamber pieces. Tubin's *oeuvre* gained international recognition mostly posthumously, partly because of the efforts made by Estonian conductors like Neeme Järvi, his son Paavo Järvi, Arvo Volmer, and Eri Klas, who have frequently performed Tubin's compositions with numerous American and European orchestras.

Symphony No. 5 in B Minor was Tubin's first symphony in his exile in Sweden. It was composed in 1946; its premiere took place in Stockholm on November 16, 1947. The work was performed in Tallinn, the capital of Estonia in 1956 — the composer had been in contact with his homeland after the Second World War. The symphony comprises three movements. The first contains two distinctive themes, which intertwine towards the end of the movement. The second is a slow movement based on an Estonian folk song and an old chorale. The last movement begins with a melody comprising fragmental motives played by the bass instruments. The mood created here remains during most of the finale.

Johannes Brahms (1833–1897)

Symphony No. 4 E Minor Op. 98

Symphony No. 4 in E Minor, Op. 98 by Johannes Brahms was written between 1884 and 1885. Its premiere took place in Meiningen, Germany on October 25, 1885 under the direction of the composer himself. The symphony consists of four movements, of which the fourth utilizes the bass line of the closing piece of Johan Sebastian Bach's Cantata *Nach dir, Herr, verlanget mich*, BWV 150.

Brahms was known to have had a keen interest in the works by the composers of the past. He was, for instance, heavily influenced by Beethoven as well as other "classical" composers like Joseph Haydn. All of Brahms' four symphonies exhibit some "classical" elements; however, Brahms explored in his Symphony No. 4 music that was older than that of "classical" composers, resulting in his writing the finale of the symphony in the style of "Passacaglia," a set of variations that had been popular in the Baroque period. Brahms accumulated knowledge on the music of the past composers much before he began writing Symphony No. 4. In the early 1860s, Brahms wished to become a conductor at the Hamburg Philharmonic in his birthplace Hamburg. He, however, was not able to obtain the post and eventually took up residence in Vienna, Austria, where in 1863 he began conducting the *Wiener Singakademie*. Here Brahms performed the works by Bach, Heinrich Schütz, and other early composers like Giovanni Gabrieli.

Akira Ishii | For a profile of Akira Ishii, see p.42



演奏会形式で上演されたワーグナー《歌劇「さまよえるオランダ人」》。映像は中野一幸が担当した(4月5日)

公演報告

東京・春・音楽祭2019

東京春祭ワーグナー・シリーズ vol.10

さまよえるオランダ人 | 演奏会形式／字幕・映像付

4月5日、7日、東京文化会館 大ホール

Tokyo-HARUSAI Wagner Series vol.10
 "Der fliegende Holländer" (Concert Style / With Projected Images and Subtitles)

10回目を迎えた「東京春祭ワーグナー・シリーズ」、今年の演目は《さまよえるオランダ人》でした。

アフカムのスケールの大きな音楽作りに導かれたオーケストラと合唱、

世界最高峰の歌手たちの名唱があいまって、会場に大きな感動をもたらしました。

指揮：ダーヴィト・アフカム オランダ人：プリンターフェル ダーラント：イェンス・エリック・オースポー センタ：リカルダ・メルベート
 エリック：ペーター・ザイフェルト マリー：アウラ・ツワロフスカ かじとり：コスミン・イフリム

合唱：東京オペラシンガーズ(合唱指揮：トーマス・ラング／宮松重紀)

写真提供：東京・春・音楽祭実行委員会／撮影：青柳 聡



熱烈な拍手に応える出演者陣。オランダ人役をプリンターフェル(右から4番目)、センタ役をリカルダ・メルベート(右から3番目)、ダーラント役は当初発表の出演者に代わり、イェンス・エリック・オースポー(左から4番目)が務めた。エリック役はペーター・ザイフェルト(一番左)(4月5日)



指揮を執ったダーヴィト・アフカムと、コンサートマスターを務めたライナー・キュッヒル(4月7日)